

あてがいぶちのシラミから

極寒の細走まで

駒 金 哉

私の初犯で行った所は、年令的に二〇―三〇歳が主で特に二〇―二五歳が八割だった。未決中にさんざん役人に驚かされ、下獄するのが恐くて父を呼び、なんとかしてくれと願ったが、父が「昔は悪い事をしなくても、男二〇歳になれば軍隊という監獄へ強制的にプチ込まれちゃの明け暮れてクソをたれながら涙を流したものだ。今は殺されるであるまいに人生の良き経験だ。家の事など忘れて元気で務めて来い。皆んな待っているから……」と別れの激励を頂き「どうでもしやがれ！」という根生に変えビクビクと下獄した。

私物衣類をハガレてシラミとノミまであてがいぶちのアオチン(官服)を着て舎房に入る。あいさつ(罪名、刑期、名前等)すると、手ぬぐいで目隠しをされ早速ヤキを受け、今までの便所当番から次の新入りが来るまでその他一切の引継ぎを受けた。その夜から便器(五〇セ

ンチの楕円形、高さ四〇センチ)の脇でねて毎朝夕の出し入れ(九―一五人の雑居で一晩でマンタンになる)をする。そして先登の後に続いて出役する途中に裸検身があり、自分の称呼番号を大声で叫び、片足ずつ上げて足の裏まで見えるようにしながら木馬をまたぐ。その先につるしてある作業衣を着て食堂に入り、その後工場にて全員にあいさつをする。工場は五工場あり、一工場に五〇人―八〇人位おり、各々大、中、小の幹部がおりそれらに一人ずつあいさつするには三日位かかる。幹部に知人がいれば大変助かる。あいさつは罪名、刑期、土地、名前等でこれにより後の扱いが決まる(罪名でほとんど左右される)。ヤクザとカタギでも分かれる。殺人、傷害、恐喝、強盗、博打等がヤ公系で窃盗、詐欺系がカタギとされ、その下がパーブー(精神異常とされている者)という。とにかく獄は社会の縮図です。

新入分類期間は二週間で出役場所が決まる。私は木工場と決まり、百人近い工場へ決まり、毎日が使用不能な道具の手入れとゴミのない所を掃除しながら一日中幹部達の顔色を見ながら一日が終る。なんとも心労の激しい所だ。一ヶ月―二ヶ月して次の新入りが来てやっと解放感を知る。なんと言っても食料難の時代だから、一日中食べ物の事で苦心する。そしてまわりになれてくると反則を覚えてくる(覚えさせられる)。

盛んだったブラックマーケット

当時は社会と同様ブラックマーケット(反則)が盛んで、煙草が貨蔽的役割をしていた。それで売買される物は、めし一本と煙草半分、おかず二回分、煙草半分、私物石鹸一個と煙草一本、私物パンツと煙草二本、毛糸胴巻では五―六本。チリ紙百枚と半分、オカマ一回で一―二本などと反則マーケットは無限にある。暴露した時の責任を買い特攻隊(懲罰へ)、売買の仲介、運び屋等々無い物は女と酒の本物だけだ。とにかく当時は役人もかなりやっていて、製品の依託業者、未決囚から弁護士、出獄者の投げ込み等々想像を絶する物がどんどんまわっていたのだ。ネタの切れたのを知らない位だ。役人などは自分でネタをまわしながら反則が他の役人にバレると

そいつと一緒にたつてクソの出るほどバットで叩くのだから頭に来るが、文句を言えば以後全てのマーケットから締め出しをくってしまう。とにかく拾ったの一点ばりて通さなくてはならぬのでケツはいつも真黒になっていた。ヤキは安かったが懲罰房へプチ込まれる事は少い。反則を隠れてやる分にはそれを探そうというヤギな役人もいなかった。大半がやっている事だから、役人の気持が悪く訳もなくブットバサレル事があってもただあやまるだけで済む。あまり荒っぼい時には幹部級の奴がオヤジに詫びてくれるとたいいていは止めてくれる。早く役人の個々の性質を知る事だ。要するに懲役は全て要領よくやる事だ。反則の取り引きの場は、四五分の昼休みに各工場の全員が大運動場に出て遊ぶのでそこで行なわれる。役人は三〇人位がまわりの要所に散り、その中では五六百の懲役がいたる所で何かをしている。毎日のこの時間何より楽しい。一番多いのは裸になってシラミを取る様だ。これ故に役人は中に入ってきて来ない。それぞれのグループの陰で煙草を吸う者、パクタン(農薬ニコチン)を吸う者もいる(これは二服も吸いと倒れる)。

か細いヒモとして……

砂場の脇にある便舎(懲役の便をためておく所、百姓

もない。六分の一、五分の一も反則なしの引受人ありの条件付きである。結局前科者には仮釈は夢という事だった。とても反則なしの「渡世」ではない。

私がいまだ忘れない懲罰は、当時病舎へ暖房を入れるという事でその配管の掘削作業をしている時、あまり寒いので（零下一五―二五度が毎日だ）、シンナーを水で割って飲んで土方をやっているときだった。地表から三〇―五〇センチまで凍ってツルハシの先は丸くなり、オチコロに一杯の土も崩れずはねられてしまう為、大ハンマーで地表を空打ちして地表をゆるめて更に三〇センチのタガネを地を切るように並べ打ちしてからやっと一カケラの土を掘る（というより手でどける）。そして次々と進める内に一人で一立米の五分の一（採箱三ツ分）位しか掘れず、翌日はその下が更に凍っているという事で一メートル五〇センチの深さを一メートルの幅で一メートル進むには一週間はかかる。その掘出は砂の様に崩れやすい。その盛り上げてある上へ役人が来て計棒で見て歩く訳だが、やっと掘り上げたのを側へ来て崩して穴を埋めてしまつて笑っているの、シンナーの酔いとあわせ頭に来。穴の中からその役人の足を引いた事により穴へ落ちて大騒ぎとなり、特警が二〇人位とんで来て殺人未遂という事にされ、暮の二五日から二月の中頃までの五

〇日間懲罰を受けた。この懲罰房が恐しい所で内壁に五センチ厚みの氷が張る。どこからこんな水分が来るのか、日中に一日がかりで取つても夜の一〇時頃からビシビシと割れる様に氷が張り始めてくる。そうなると眠れずに起きて足踏みして一夜を明かす。床はレンガでゴザ一枚と毛布二枚。服は下着だけというのだから毛布を体に巻いて、ゴザを小さく折ってその上を足踏みしている様を想像してほしい。死んでいないかと一時間おきにのぞきに来る。この五〇日間は言語に絶する事ばかりだった。今だに思えば怒りがこみあげてくる。

（この頃の反則といえは獄内の規則違反位で、外部と結ぶ事は煙草位の事だった。ヤキがなくなった事により、のべつ規則責めにされていたのでは精神的にまいってしまふ。要するに先に書いたように二〇年代はシラミとヤキと反則と仮釈が安く、一年賃金は千五百円前後、社会の一日分。三〇年代はシラミなし反則品少々仮釈なし刑は重い、一年の賃金は土方の一日分。四〇年代精神的苦痛大にして仮釈なし、反則品ほとんどなし、一年の賃金三千円前後、社会も同じ一日分。五〇年賃金一年五千円前後。誰が決めるのか賃金だけはいつも社会の一日分が懲役の一年分と合致している。これが更生資金なのだ、早く戻って来いという）